
第 3 の物語

松谷ソウイチロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第3の物語

【Nコード】

N6445B

【作者名】

松谷ソウイチロウ

【あらすじ】

人生という舞台に上がっているのは主人公だけではない。この世界ではありとあらゆるものが繋がっているのだ。

人生という舞台上上がるのは、主人公だけではない。

この世界では、ありとあらゆることが繋がり、あらゆることに裏と表がある。

良かれと思って行動したことが、見知らぬ第三者を傷つけることもある。

たとえちっばけでも傷つけられた思いは消えない。

あなたの善意の前に苦しむ誇り高き良心があるかもしれぬ。

隆文は電車たかふみで本を読むことを習慣にしている。

その日も、三鷹行きの地下鉄に乗り込み、空いた席に座るや否や、読みかけの文庫本を取り出した。お気に入りの女流作家の最新ミステリーである。

連続幼児殺害の犯人がまもなく捕まる。

ガタゴトと揺れる電車の音や振動も忘れ、隆文は一心不乱にページをめくり続けた。

その時、隣に座っていた女性がやたら立ち上がった。

60を越えているだろうか。喋った声には若々しい張りが無かった。「どうぞ、座ってください。」

右斜め35度、漆黒の杖をついた老人が目につく。

足腰が弱っているらしく、電車の一瞬の揺れに大きく体をのけぞらせた。

どうやら席を譲ったようだ。

その光景は異様だった。なぜなら、席を譲った老婆も傍目には、長時間電車の振動に身を任せるのは難儀である位に見えたからだ。明らかに膝をかばっている。

周囲の人間が横目で周りを伺うのがわかる。

お互いに牽制しているのだ。

視線と視線が交錯する。

「お前が席を譲れ。」

老婆は体を回転させ、吊革の一つを掴む。

隆文の目の前に立った。

自然と周りの視線も隆文に集まる。

「お前が席を譲れ。」

その視線を全身で感じながら、隆文は全く見当違いのことを考えていた。

「この老婆は馬鹿なのだろうか。」

老婆が席を譲ることで、そして僕の前に立つことで僕が窮地に陥るということがわからないのだろうか。あるいは、わかってわざと老人と老婆が二人とも座れるように敢えて僕を挑発しているのだろうか。

本の字面を追うフリをして、考えをめぐらす。

思考のパズルは一瞬にして組み立てられる。

「席は譲らない。」

老婆が、無垢な親切心から席を譲ったのだとしたら、それはあまりにも愚鈍で低劣だ。

そつすることで隣に座っている若者が冷たい視線を浴びることを考慮していない。

経験だけが取り柄の年寄りにとって、それは致命的な過ちである。

わざと僕を挑発しているのだとしたら、そんな挑発にはのる必要は無い。

相手が老婆であろうと容赦はしない。

相手に対する思いやりが、見知らぬ第三者を傷つけることがある。

当然だ。

舞台上上がっているのは、主人公だけではない。

舞台を彩る脇役にも、プライドや見栄はある。

それを知らぬヒロインは、決して幸せな結末をたどることはない。

思考がそこまでたどり着いた時、隆文は突然すつと立ち上がった。

「どうぞ、座ってください。」

優しいうつとりするような声だった。

全てを受け入れた義侠がそこにはあった。

しかし同時に、そこには、全てを理屈通りに進めることで老婆に第三者の存在を知らしめてやるのだ、という薄汚い野望も共存してい

た。

「あなたがたつた今行った無神経な親切の罪を自覚させてやる。」
如才なく笑顔を振り向いたその奥では、邪心に満ちた思惑があった。
こうすることで、周りは私を思いやりのある好青年だとみなし、あなたは自分の罪に気づくだろう。

さあ、座れ。

そして気づくのだ。

隆文の口から歪んだ笑いがこぼれる間際、
電車が振動を止め、キーっとブレーキを踏んだ。

「私ここで降りますから。どうもありがとう。」

老婆は一礼して、さっと電車を降りた。
立ったままの隆文は一人取り残され、呆然と立ち尽くす。
周りの視線が痛い。耳の裏まで顔が真っ赤になってるようだ。

人生はうまくはいかない。

老婆から一つ教訓を得る。

電車は再び走り出す。隆文は、文庫本のページを開く。

内容はもちろん入ってこない。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。今回はシュールな作品になりました。稚拙な文章で恥ずかしい限りですが、アドバイスをいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6445b/>

第3の物語

2011年1月26日22時58分発行